

## 歌人探訪



晩年の透（昭和56年）

# 前田透

前田芳彦

前田透は近代歌人として若山牧水と共にその名を知られた前田夕暮の長子で、大正三年生。昭和十三年東大卒、翌年陸軍に入隊。中国、マニラ、スラバヤ経由、昭和十七年チモールに駐留。敗戦により昭和二十一年に復員した。三十二歳であった。

昭和二十二年に香川進の紹介で東亜貿易株式会社に入社。二十六年、同社倒産後、東洋紡系新興産業を経て四十六年母校の成蹊大講師、四十九年同校教授となり、以後教育者として勤めた。五十九年一月、自宅近くでオートバイにはねられ死亡。享年七十歳であった。彼は「詩歌」を創設し、歌壇では知名の作者であった父夕暮を取り巻く文学的環境の中で自由な若年期を送った。大正十年、七歳のとき当時しばしば夕暮宅に出入していた矢代東村のすすめで始めて作歌を試みたとある。

わが家の二階から見る煙突は青き煙を大空にはく

素朴だが幼年の作品としてはこんなものだろうか。また夕暮が口

語、自由律を開拓していた頃、彼は東大経済学部で陸上競技と山歩きに熱中して、夕暮のもとめがあつてはじめて「詩歌」に月例作品を出稿するといった状況であった。その頃の作品は特にすぐれていると思わないが、若さに溢れた自由律作品がおおい。このとき世は日中戦争に突入していた。

匍松の尾根踏んで行くと、雨投げて来る。

あとから雲が来る

「初期歌篇」

旗をふる旗をふる紙の小旗。その母のうしろで俺も旗をふる

透は十四年台湾（台南）の歩兵隊に入営する。つづいて経理部幹部候補生となり、陸軍経理学校に入学。のち中国、比島経由インドネシアのポルトガル領チモールの首都であるデリーに駐留した。ここにおける四年間は終生忘れることなき印象を抱くに至った。透にとってかの地は機会あれば意識にのぼる言わば思い出の地であった。従って処女歌集の『漂流の季節』から晩年の『天の金雀枝』に至る



婚約時代（昭和15年1月）

まで屢々<sup>しばしば</sup>作品に現れている。

透が最初に出版した『漂流の季節』は「若き陸地」と題しチモール詠より始まるが、経理将校として兵の辛苦を味わうことのなかった若い透が自

由の利く南海の地で送った日々が楽しそうに語られる。それは「若き陸地」の一篇から晩年の作品に至るまで屢々取り上げられ、みづから「作歌の底流」と言うほどであった。

東チモールは当時中立国であったポルトガルの植民地で、国際法を重んずることの少なかつた軍部にとつて一応の配慮は払つたとしても結局はこれを占拠し、オランダ領の東チモール共々全島を統治するに至つた。透は東の首都デリーにあつて約四年間を過すことになる。戦闘のなかつた植民地占領軍の主計将校である透にとつて、この地にあつて送つた日々は中国とは異なる生活環境を持つていた。南海の幻想的な風景はそのまゝ透の日常に繰り込まれていた。彼は少年ジュオンを愛し

さそりが月を囓ると云へる少年と月食の夜を河に下り行く

『漂流の季節』

と歌い、南島への感傷をチモール詠として戦後辛苦の中で堰を切つたように作品化し、以後止むことがなかつた。彼の地は透にとつて桃源郷の如く深く安らぎを覚えるところであつた。

## 透 田 前



父・夕暮らと（昭和22年）

透は戦後困窮の中で作歌に努めていた。

焼あとの運河のほとり歩むときいくばく  
の理想われを虐む

河くらく流れてをれり夜の潮やがて上ら  
むわが去りしのち

風さむき千葉街道が昏れ行けば灯をともし  
待つ妻とをさなご

『漂流の季節』

これらの作品群は彼が戦後の生活苦のなかで歌うことのくやしさを如実に現している。

「押し流されるもののうめきは弱く、くらいかもしれないが、それはうその声ではない。さう云ふ声は時代の声であるとき打ち消されることはない。」と彼は率直に歌集の後記に自身の心境を書いてい

るが、考えようでは積極的に言上げすることで自らの弱さを押さえ込んでいたのかも知れない。同時にそれは戦後の姿をあからさまに写し出すものとなっていたのである。

彼はドイツ駐在を望んで果さず日中貿易を主唱、友好商社としての指定を受け屢々広州、北京を訪問した。しかし商売は先駆者としての利益を十分あげるに至らなかった。文化大革命の中で専らその動きに注目していたが、商売の種とするに十分でなかった。

### 大いなる旗赤く流れ域外より朔風きたり

人みなかがやく

「煙樹」

### 北京車站冬日かぎりて丈高き北方の人我 に近づく

透の中国往来は前後七回に及んだ。

彼が特に執心したのは広州とチモールである。望みつつ再び訪問の機会を得なかった中国へは文化大革命の最中に入国するというチャンスを得た。

透の中国詠の中核をなすものは戦時中の記憶ではなく、日中貿易での往反の途次に見聞きした文化革命運動であり、あれ程の機会を持ちながら各地の知られた文化遺産に就いて殆んど興味を示していない。彼が歴史よりも現在の社会に目を向けていたのは、文学者のあり方として特徴的である。

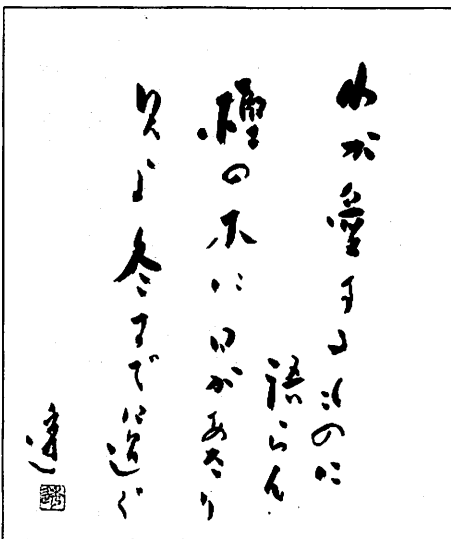
透は商社社員として特に有能と見られていない。「よき会社にせんと勤めし我を逐い歌つくりの道に励めとぞいう」感謝状を裂き社長室をいでしかば人は片寄りわが道をあく」（『銅の天』）などの作品は

自負と周辺の評価が全く異なっていたことを示すものであろう。彼は昭和四十四年、五十五歳で新興産業を辞めてから自由を得たように作歌にはげむ。その後、大妻女子大、次いで母校成蹊大学の講師から教授を経て明星大学に転じた。翌年一月十一日自宅近くの環状八号線の交差点近くを横切ろうとして輪禍に遭い二日後に死去帰天した。彼にとり不幸な禍であったと言わねばならない。

### わが愛するものに語らん櫟の木に日があ たり見よ冬すでに過ぐ

「冬すでに過ぐ」

この歌は透がキリスト教に入信した晩年の作品である。それに至るまでの道程は、むしろ知的に傾斜する彼の良心というよりも内心の弱さが目立つようである。夕暮は残るが透は残らないとまで言った人もいた。然し聖書の表現に沿った言い方をすることで力強さを自らのものにしつつある彼の、心の内側が見えるような歌であると言えよう。キリスト教は祖父以来親しんで来たものだが、透の場合、妻雪子も熱心な信者でありこれら周辺環境から入信するに至ったのも当然の成行であったと言える。彼の歌には、その表現に宗教的な痕跡が色濃く現われるようになり、キリス



直筆色紙

ト教的短歌作者の一人と言われるまでになった。しかし、よかれ悪しかれ直面する現世の地獄より遠ざかってしまったのである。

戦争の年代に描きしキリストの顔がしずかに見つめていたり

「断章」

このルオーのキリスト像を詠んだ作品などは、むしろ彼の内心の叫びをあからさまに示しているものと思う。

子の受洗願える妻に従いて冬の芝生をめぐり訪れ行く  
片耳を大きく描きし亡父像見ざるが如く吾を視ている

「断章」

第一歌集『漂流の季節』は新歌人集団の一人として歌壇における

彼の地位を定めるものであったが、第二歌集の『断章』はこの延長線上にあつて次の飛躍を試みるというよりも、いささか地味に同一線上を推移していたと思われる。「内的展望を深めて行きたい」と後記に書いているが、現実には次歌集というより遙かに時間のかかる作業となった。

第三歌集『煙樹』は主として中国の交易に従いながら遭



家族と（昭和32年、豊島園で）

## 透 田 前

遇した文化大革命前後の激動を作品化する。この歌集は彼の年齢に加えて中国の大変動を親しく見るというテーマを得て油の乗り切ったものになった。

激語せし女子学生しずかに泣き始む樹下  
集会に誰も黙して

「煙樹」

香港にいでて思えばかの国は河濁り悲痛  
のさまに流るる

透は、「作品は作品自体で語られるしかない」と後記に書く。よく言われながら現実化しにくい真実をこの時点でどう自覚していたか、やすやすと判断出来るところでない。彼は同じく後記で「二十数年前の南の島の記憶や、妻と糖尿病の長女みなみのカトリックの世界は、私をめぐる大気圏のように、淡いが私はその中で呼吸している。」とも言っている。

彼は第四歌集を『銅の天』と題し聖書の影響を色濃く見せたものにまとめ上げている。

わが一世きわまれりとは思わねどビルの  
上青し一かけの空

「銅の天」

透はチモールを再訪し記憶を新たにしたが、かの地は彼にとってそれを必然とするところであった。「ユーカリ樹林霧たちしている高地の村われは文明より来りしならず」チモールは昔と変わらず彼を包んでいるが、事実は今の生活の中にぽっかり開いた孔のようなもので何が慰しとなっても再び帰ることの出来ないところであった。

六十歳を越えて彼は身近な過去を顧るようになった。『評伝前田夕

暮』『鑑賞 直文 槐園 躬治』がそれに当る。またカトリックの洗礼を受け、次第に晩年の豊饒に向っていた。

樅の木に風の夕日が散らばえばまた耐え  
ゆかん／一つの晩年

『冬すでに過ぐ』

彼が一つの晩年と行替えた気持は複雑であったに違いない。しかも聖書の影響も読みとれる。

ミサに行く道の彼方に光りつつ積乱雲立  
つ／神は早に在り

『冬すでに過ぐ』

樅の木に凜々たる朝の光さし新しき霜砕  
けんとする

特に樅の木について特長のある歌が見られる。また、例えば

鎮まれる朝光ひろし教会の樅の木群に寒  
は到れり

『天の金雀枝』

樅の木群冬の埃が吹き行けば あがない  
の年既に到れり

『銅の天』

などという歌もある。さらに付け加えれば

樅の樹冠風わたり行くひたすらを夏に入  
らんと燃ゆる吾が生

『銅の天』



第15回追空賞受賞（昭和56年）

暁闇の樅の木群に降る霜のしとどに冷え  
て鳥は来ぬのか

『天の金雀枝』

透は本来樅の木に相応う性格を持っていると思わない。しかしキリスト教との関係でこのように多くの樅の木を詠むことになったと言える。彼は学生時代には左翼的な傾向を明らかに見せたが、年を経るに従い宗教的な傾向を抜けて行った。いずれにせよ、長男的な素直さでそうなったといえる。

透の後年の作『銅の天』『冬すでに過ぐ』『天の金雀枝』についても歌集自らが流れを示していると思われる。これら歌集名からもテーマの意味の深度が十分読みとれると言えるかも知れない。彼にとりキリストは宗教として、また、表出技術からも多くの問題をかかえていた。

例えば彼の左翼的な言動―知識人特有といつてよいかも知れない―は私などがそのまま素直にいただきにくい点であり、現実は一層

泥くさいものがあると思う。考えようでは性格的に決まっていたと考えるべきであろうか。これらは彼の作歌の弱さとなって底流しているように見える。

不寛容の世の片隅に生き足れりと歌いし  
父の心もかなし

「断章」

受洗する子のため白き服を縫う妻の世界  
よ脆く崩るな

夏すぎてあかざみだるる一隅に茫たる青  
春の夜は到らん

「煙樹」

彼は自宅に近い修道院の女性らとも親しくしていた。周辺のカトリック的雰囲気は作風に明瞭な陰を落している。それは表現として

いつか沈潜して作風の一面となるべきであったろう。

透は『前田夕暮全集』を刊行し、  
遡って『鑑賞 直文 槐園 躬治』

と系譜をまとめてみるという基礎作業を完成した。多くの時間をかけこれら手間のかかる仕事をまとめて上げて当面の懸案を果し、最後に自らのケルンを積み上げるところへ来ていた。『銅の天』につづく『冬すでに過ぐ』『天の金雀枝』の



自宅の庭で（昭和58年）

## 透 田 前

三歌集は彼のキリスト教に対する状況をありのままに示す集名を持ち、作品の位相を端的に理解出来るようにしている。その作品のうちで例えば次の歌、

ばんりゅう  
萬流の油そそがん六月の日を遙かとし天  
えにしだ  
の金雀枝

『天の金雀枝』

はよくこれを示しており、それなりに緊張した作品となっている。短歌と宗教についての関係は困難なからみがあり、今日までに納得のゆく理解を示した文章や作品は見ることがない。東洋の伝統にはこの点に十分な解析がなかった。透の苦勞も今後に残されていると思われる。



最後の旅（昭和59年、箱根）

（まえだ・よしひこ）「青天」同人